

鐸 木 昌 之 著

『北 朝 鮮——社会主義と  
伝統の共鳴——』

東アジアの国家と社会 3

東京大学出版会 1992年 iv+269+7 ページ

河 原 地 英 武

I

今日の朝鮮民主主義人民共和国（以下、北朝鮮と略記する）は、他の社会主義諸国、あるいは他のアジア諸国と比べても、きわめて特異な政治体制を築いている。金日成がすでに半世紀近く最高権力の座を維持しているだけでも驚くべきことだが、その後継者に子息の金正日が指名されていること、さらに言えば、金日成の血筋を引く金正日以外に後継者はありえないことが北朝鮮内で公認されていることは、われわれと時代を同じくする国家のありようとして不可思議な思いがする。

本書は、「首領制」という概念を提起して、この不可思議な北朝鮮の政治体制の構造と論理を解明した独創的研究である。

北朝鮮の政治を論じた著書や論文は、決して多いとは言えないまでも、わが国にそれなりの蓄積はある。だがその大半は、われわれの価値観を尺度として論じるために、北朝鮮政治の理不尽さや抑圧的側面ばかりを告発暴露する結果に陥っている。現に北朝鮮の政治体制が成立し機能している以上、その体制を存続させる何らかの必然性を看過しては、北朝鮮を研究したことにはならないだろう。他方、北朝鮮体制の内在的論理を説明しようとする場合には、北朝鮮の公式的見解に追従し、そのイデオロギーを密儀的に解説するといった事態に陥りかねない。本書はこれらいずれの弊をも免れ、検証可能な真に客観的叙述に徹している。

著者の鐸木昌之氏は、方法論として、「北朝鮮政治の内在的論理を追究することを通して、その政治体制

の特徴を考察することに重点を置」（3ページ）いている。すなわち、公刊されている北朝鮮側の諸文献を官製の虚偽的文書として退けず、むしろ丹念に精読して、そこから浮かび上がる論理構造を社会科学的に読み解く方法をとっている。著者は異なる時期に出された公式文書をそれぞれ突き合わせ、そこに見られる差異に着目して公式文書を相対化している。また、しばしば故意に神秘化され、壮麗な装いを纏っているイデオロギー体系を、普遍的な社会科学の用語に置き換えて再構成しようとしており、そのような著者の研究方法が本書の客観性を保証していると言える。

著者は北朝鮮の政治体制を「首領制」と名づけている。ちなみに「首領」とは、北朝鮮で用いられている金日成の呼称である。著者は北朝鮮の政治体制を規定するにあたって、社会主義国に一般に適用される「一党支配体制」や「全体主義体制」といった既成の概念をとらなかつた。また、金日成への個人崇拜に注目して「金日成体制」あるいは「金日成独裁体制」と呼ぶこともしていない。著者はなぜ、「首領制」というわれわれに馴染みのない独自の概念をあえて提起しているのか。それは金日成から金正日へという、権力の父子継承に着目したからに他ならない。

古代や中世ならばともかく、現代国家において権力の父子継承が正統化されることは異常な事態と言わねばならない。近現代の諸国家は、多かれ少なかれ、民主主義という時代の精神を受け入れることなしに成立しえない。北朝鮮もその例外ではない。まして北朝鮮では、社会主義という、より純度が高いとされる民主主義を標榜しているのである。民主主義体制のもとで血縁支配を合法的に打ち立てるために北朝鮮は、常識を越えた、奇怪とも思える壮大なイデオロギー体系を築き、それに対応する政治制度を構築してきた。

北朝鮮における政治的エネルギーは、金日成から金正日への権力移譲を確実にしめるという一点に収斂される。そして逆にこの一点から、北朝鮮のすべての政治的現象が流出するのである。著者は、このような政治構造が成立する過程を歴史的に論証し、さらに、ひとたび完成されたこの体制が、今日の北朝鮮の政治をいかに規定しているのかを冷徹に分析している。

## II

本書は、以下のような構成をとっている。

序 章 首領制の仮説

第1章 体制の起源と革命の課題

第2章 首領制の権力構造

第3章 金正日指導体制の形成

第4章 首領制の「国体論」

第5章 体制神話——星・太陽・白頭山、血脈・地脈・精気——

第6章 選択的「開放」と部分的「改革」

終 章 首領制の構造と論理

上記の構成が示すとおり、本書の主題は首領制を説明することである。著者が北朝鮮の政治体制を「首領制」と名づける所以は、先にも述べたように、権力の父子継承に着目するからである。首領は金日成とイコールではない。首領と言うとき、そこにはすでに後継者の金正日の像が連想されるのである。確立された金日成体制のもとで、後継体制である金正日体制がすでに公然と、合法的に承認されているわけである。しかも、このような権力移譲が承認されるのは、まさに金正日が金日成の血筋を引く者であるからに他ならない。首領位は、血縁により引き継がれるべき座なのである。

首領制とは、北朝鮮という社会主義国において、血縁支配を正統化し合法化させるために設けられた、いわば大がかりな装置と言ってもいい。この装置を作り上げたのは金日成と金正日、それに彼らを取りまく側近たちであった。当然のことながら、その過程で反対者たちが現われ、権力抗争が行なわれた。金日成たちはこのような抵抗を押し切って、今日の磐石とも思える支配装置を完成させたのである。さらに指導部は、この装置を恒久的に作動させるために、首領制をめぐるイデオロギーと神話の諸体系を整備し、国民への教育を徹底させているのである。それでもなお、この支配体制に亀裂が生じないという保証はない。金日成体制を後継する金正日には、前体制が経験しなかった未曾有の試練が待ち受けているのである。形式的な要約ながら、本書はおよそ以上のようなあらましに沿って、議論を進めている。

第1章では、首領制の前史、すなわちその原型である金日成体制が確立するまでが論じられている。わけでも抗日民族解放闘争期は、金日成体制の正統性の根拠となり、今日では神話化されているが、著者はこの時期における金日成の戦歴を丹念に検証して神話を史実に引き戻している。また、この時期の金日成の戦友たち（満洲におけるパルチザン・グループ）が、その後、金日成体制を支える人脈を形成していることを明らかにしている。1945年以降は南朝鮮の革命と南北統一が共産主義者たちの課題とされ、この課題達成のための革命根拠地とすべく北朝鮮が建国された。著者は、北朝鮮建国後に金日成が直面した革命課題や分派問題に論及し、その中で、民族主義の強烈な表現に他ならない主体思想が唱道されるに至った道筋を辿っている。

第2章と第3章では、首領制の成立過程が実証的に考察されている。これらの章では首領制の構造が具体的に明かされていて興味深い。評者の関心に沿って、その論旨をごく大まかに紹介すれば次のようである。

著者によれば、首領制は1967年には確立し、70年代初頭に党規約や憲法で制度化された。すなわち、金正日による後継体制は早くもこの時期に整っていたのである。後継体制の確立が急がれた背景として、ソ連や中国で示された後継問題の難しさに、金日成が危機感を募らせたことが大きかった。

首領制を確立するにあたって、唯一思想体系が樹立された。これは金日成の主体思想を唯一絶対の指導指針とすること、そして党と国家は首領の領導に無条件かつ無制限に従うことを要求するシステムのことである。唯一思想体系の樹立により、首領は党と国家の上に臨在して革命事業を領導する超越者となった。このような首領を戴く体制が、党の指導を絶対視するソ連型社会主義に比べていかに異質なものが納得されよう。さらに、指導部は、この首領が領導する革命が、代を継いで継続されるべきものであることを強調した。そこから当然、このような継続革命の総体を領導し続ける首領は、金日成という有限な一個人を越えた存在でなければならないということになる。つまり首領制は、その後継者の想定なくして成り立たない概念なのである。このようにして、後継体制が首領制によって正統化されるのである。

だが、上記の説明では、血縁支配までを正統化させるには不十分である。その正統化のために金日成を中心とする党指導部は、革命伝統教育の強化を唱えるのである。ここでいう伝統とは、金日成に指揮された民族解放闘争を指す。金日成と彼に従った革命家たちの事績が神聖視され、その輝かしい伝統を子々孫々にわたり、代を継いで継承すべきことが強調されるのである。こうして伝統の継承は、血縁の相伝と重ね合わされた。その観点から見れば、金正日が金日成の代を継ぐことはごく自然なことであった。さらに興味深いことは、金日成とともに闘った革命家たちの子弟も特別視され、彼らが次代の革命の担い手だとされたことである。こうして、党指導部の子弟たちもまた、金正日側近としての地位を保証された。血縁支配は金日成父子にとどまらず、北朝鮮の政界全体を覆っているのである。

だが、このような後継体制の基礎固めは決して無風状態の中で行なわれたわけではなく、いくつかの重大な政治的葛藤を伴った。この葛藤において金正日がきわめて能動的に活動し、自らの基盤強化に奮闘していた事実について、第3章が詳しく伝えている。そこからわれわれは、金正日の意外に強烈な個性と政治家としての相貌を窺い知ることができる。

第4章では、首領制に関する2つの理論（革命的首領観と「社会政治的生命体」論）が紹介されている。これらは、北朝鮮の唯一思想である主体思想の一部をなすものだが、ともに首領制を直接説明する部分として位置づけられる。この2つの理論のうち、前者は主として首領概念に関して、また後者は「社会政治的生命体」に関して北朝鮮で展開されているさまざまな教説を総称したものと考えておきたい。両論とも首領制を正統化している点で共通し、実際その内容もかなり重複しているが、前者の主眼が首領の絶対性を主張することにあるのに対し、後者は党員や人民大衆が首領に帰依すべき根拠を示すことに力点を置いている。また著者によれば、前者は首領と党員・人民大衆との垂直関係を規定する点で「権力の空間的構造を説明する論理」であるのに対し、後者は「政治的生命」の永遠性を説く点で、その時間的構造を解説したものだという。

これらの理論の詳細は本書に委ねる他ないが、著者の指摘として特に重要と思われる点を2、3述べておきたい。第1は、これらの理論により、北朝鮮式社会主義は、唯物論に基づく在来社会主義とは全く別種の、意識改革が先行する唯心論的教説へ生まれ変わったということである。したがって、少なくとも理論面では、ソ連東欧圏の崩壊はもはや脅威とするに足りないことになる。第2は、首領制に関する教説が、わが国戦時中の「国体」論と類似していることが示唆されていることである。この点は日本政治の研究者の意見も聞いてみたいところである。第3は、首領制の論理構造が、朝鮮古来の儒教的伝統と共鳴しているとする指摘である。首領制論を組み立てている個々の用語が儒教からの借用であるだけでなく、「社会政治的生命体」論をはじめとする論理構成そのものが、儒教的思维体系を模したものだという。それゆえ血縁集団を原型とした北朝鮮の集団観・国家観は、濃淡の違いはあれ、隣国の韓国でも見いだされるものだという指摘は興味深い。すなわち北朝鮮と韓国は、両国とも国家意識の深部で、民族伝統的な共鳴を起こしているということもできるのである。

第5章では、首領制を支える政治神話の内容が考察されている。権力者が自己中心的に歴史を書き替えて自らの正統性原理とすることは、北朝鮮に限られたことではない。北朝鮮の特異性は、歴史の書き替えはもとより、権力者自身が人間世界の枠を越えて、人知の及ばぬ超自然的な「聖体」へと昇華されてしまっていることである。荒唐無稽と言えそれまでだが、むしろ著者は、そのような事態に研究意義を認め、金日成父子にまつわる種々の奇譚や伝説を載録している。それらは仮に詩として読めば、言語感覚の透明さといい、イメージの自在さといい、決して粗悪なものではない（と、評者には思われる）。事実、これらの「首領伝説」は、むやみに粗製濫造されたわけではなく、そこには朝鮮に古くから伝わる民間伝承や、図説説や風水思想といった古来の知的伝統が巧みに活かされていると著者は指摘する。

心理学の知見を借りて言えば、非日常的次元で語られる神話は、人間の表層意識（理性）で捉える限り無意味だが、深層意識において独自の論理性を発揮する。

深層意識は、集団意識や民族意識がまどろむ場である。この意識が覚醒するとき、人間がいかに非合理的な集団行為に走るかを示す事例は少なくない。北朝鮮における首領制神話は、深層に潜むこの集団意識を操作し支配するためのものだと言っていい。星、太陽、白頭山といった言葉が喚起する朝鮮民族固有の心理を支配して、首領制は、民族の基層意識に巧みに根を下ろしているのだと著者は分析している。

ここで評者の問題提起をひとつしておきたい。このような民族意識の古層を操作することは、首領制に思わぬしっぺ返しをもたらすことになりはしないか。すなわち、首領制にできるのは、民族意識の古層に入り込み、そこに幽棲するさまざまなイメージや情念を手なづけ方向づけることだけであり、それらを別物に鑄造できるわけではないのだ。実際、民族意識は鎮静させることはできても、滅却できるものでないことは、旧共産圏における昨今の民族紛争の噴出が教えている。仮にこの民族的情念が、北朝鮮において首領の作為に過敏に反応し、制御を越えた暴発を起こせば、首領制自体が一気に押し流されてしまうだろう。この情念は、北朝鮮という国家枠組を越えた朝鮮民族全体のうねりだからだ。著者は、「北朝鮮は儀式や祝典によって人々の忠誠心や感動を動員する祭典国家」(201ページ)だと述べているが、この動員された祭典は、沸点に達した民族意識を定期的にガス抜きする作用があるのかもしれない。民族神話を操作する試みは、扱い方をひとつ間違えば、現体制を一気に呑込んでしまう民族の古層意識を溢出させかねない危うさを伴っているように思われる。

第6章では、現在の北朝鮮体制が、対外開放と経済改革という時局的課題に、どう取り組んでいるのかが考察されている。今日の世界の趨勢が相互依存と地域統合にあることは周知の事実だが、北朝鮮指導部もその趨勢に合流する必要性をはっきり自覚しており、さらに金正日は、民生の向上なくして首領制の維持が決して安泰とは言えないことを十分に承知しているという。こうして北朝鮮は、1980年代以来、対外開放と国内改革に踏み出し、すでに後戻り不能点を踏み越えてしまったが、他方、これらの政策は、不可避的に体制の基本枠組の変更をもたらさざるを得ないと著者は指

摘している。

終章では、首領制の解体という事態をめぐる若干の言及がなされている。首領制を解体させうる内発的要因として、血縁支配による体制の腐敗が挙げられている。また、外発的要因としては、対外開放と改革が国民の欲望を刺激し、その結果、彼らの利己主義が疑似共同体的な秩序を壊してしまう場合が考えられるという。

今日の北朝鮮は壊滅的な経済危機に見舞われているとの報道もあり、首領制の解体は蓋然性のある事態だと思われる。外部からは容易に窺い知れぬにせよ、実際に体制のほつれはさまざまなところで生じているのではないか。本書では、この点は主題的に扱われていないが、首領制論の延長として著者の今後の研究に期待したい。

### III

以上、本書の概要を章を追って紹介してきたが、ここで改めて本書の意義を述べておきたい。

繰り返しになるが、第1に、北朝鮮の政治体制を首領制として規定し、その構造と論理を明らかにしたことである。北朝鮮は外部から見る限り、神秘的なベールに包まれて、何か不可解な衝動から理不尽な行動をとる国家というイメージをもたれやすいが、著者はその論理構造の内部に分け入り、体制を支えている個々の次元を再構成して、北朝鮮の政治体制を透明度の高い結晶体としてわれわれに差しだしている。本書によって比較政治学や比較体制論の専門家は、北朝鮮を対比可能なきわめて興味深い国家モデルとして論じることができるようになった。

第2に、本書は朝鮮政治の実証研究としても重要な位置を占めることになると思われる。特に貴重と思われるのは、著者が可能な限り一次資料に立脚して、記述の根拠を明示していることである。従来、北朝鮮政治に関しては、北朝鮮の秘密主義も手伝ってさまざまな憶測が裏づけのないまま事実として流通してきた。本書によってわれわれは、現時点で事実として語れることと語れないことの区別に無自覚では済まされなくなった。本書の巻末におかれている注と索引は、資料

検索の情報源としてたいへん充実していることも付言しておきたい。

第3に、北朝鮮との交流に何らかの形で携わる人々にとっても、本書は有益であろう。北朝鮮がしばしば示す一見理不尽な対外行動や、外部に向けて発信する

微妙な外交シグナルをどう読み解けばよいのか、本書がヒントを提供している。けだし真の外国理解のためには、その国を根底で支えている内在的論理を究める他に王道はないだろう。

(京都産業大学外国語学部講師)